ほっとサイエンス

Saturday

7 なっとく科学 10 11 快テク生活

自然

漂流ゴミ問題が深刻化

日本海沿岸や離島／中韓からも大量越境

日本海の沿岸や離島を中心に、漂流ゴミの問題が深刻化している。生物や景観に悪影響を及ぼすが、中国や韓国から流れてきた越境ゴミも多く、対策が難しい。（山田哲朗）

プラスチックや発泡スチロール、漁具などは腐らず、海流や風で遠く離れた場所に届く。広い海にどのようにゴミが分布しているか正確な実態は不明だが、米科学アカデミーなどの試算によれば、世界中で船や廃棄物処分場などから年間640万トンのゴミが海に流入し、1平方キロ・メートルあたり1万3000個のプラスチックが浮かんでいる。

プラスチックを食べたり、ビニールがからまったりすることで、鳥は年間100万羽、ウミガメなどは10万匹が死んでいると推定される。底引き網による調査では海底からもビール缶などが見つかり、今や「地球上の海全体がゴミで汚染されている」（兼広春之・東京海洋大教授）状況だ。

特に日本海のような閉鎖的な水域では、漂流ゴミの問題が顕在化しやすい。財団法人・環日本海環境協力センターは2004年、日本、中国、韓国、ロシアの沿岸4か国で組織的な調査を行った。51か所の海岸で、10メートル四方の調査区画174か所を調べると、平均402個、2846キロのゴミが見つかった。

こうしたゴミがどこから流れてくるのか探るため、藤枝繁・鹿児島大水産学部助教授は、簡単に見つかるプラスチック製の使い捨てライターに目をつけた。

2年かけて32人に各地の海辺で1万個以上のライターを集めてもらった結果、日本製が56％と多いものの、中国・台湾製が15％、韓国製も11％を占めた。中韓からのライターは、黒潮や対馬海流に乗って太平洋側や小笠原諸島にも到達していた。

日本の場合、ゴミを処理する責任は地元自治体にある。しかし、財政難に苦しむ離島などが、続々と漂着するゴミを自力で処理するのは不可能だ。中国や韓国から大量のゴミが漂着する対馬の場合、島内にプラスチックなどを焼却できる施設がなく、集めたゴミは北九州市や福岡市に海上輸送している。「掃除をすればするほど経費がかかる」（対馬市役所）状況だ。長崎県は、廃棄物処理法で禁止されている海岸でのゴミ焼却が可能になるよう、対馬や壱岐などを構造改革特区にするよう国に申請中だ。

11月に富山市で開かれた海洋ゴミに関する初の国際会議では、日本や中国、韓国、ロシアの行政官や研究者らが意見交換した。

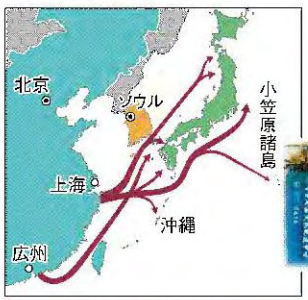
会議に出席した山口晴幸・防衛大学校建設環境工学科教授は「近隣諸国との協議の場ができたのは有益だが、現場には『島がゴミに埋まってしまう』という危機感がある。政府は発生源の中国や韓国に対策を取るよう働きかけるべきだ」と話す。

ただ、日本も〝被害者〟というばかりではない。藤枝さんは「確かに中韓の影響は大きいが、すべての地点で日本製ライターが見つかっているのも見逃せない。さらに、日本は漂着地であると同時に、北太平洋の汚染源にもなっている」と指摘する。

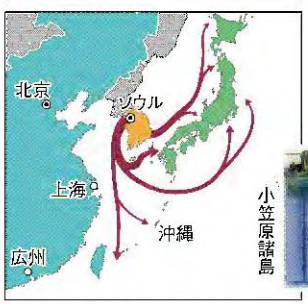
日本のNPO「オーシャニック・ワイルドライフ・ソサエティ（OWS）」（会長＝長谷川博・東邦大教授）が2001年に、太平洋の真ん中に浮かぶミッドウェー環礁で、コアホウドリが飲み込んだことにより陸地に上がっていたライター3225本を集めたところ、6割近くが日本製だった。幼鳥はライターを吐き出せる力がなく死ぬことも多いという。

「港湾」「漁業」など縦割りの担当制を持つ政府は、複雑な海洋のゴミ問題に対する動きが鈍い。

松岡達郎・鹿児島大水産学部長は「捨てられた漁具によって、水揚げ量の5～10％にあたる大量の魚が死んでいるとみられる。環境美化だけではなく、資源の無駄を防ぐという国家的な観点から強力に取り組むことも必要だろう」と話している。



中国、韓国からのライターの漂流経路



佐渡島の海岸に漂着したゴミ（山口晴幸・防衛大学校教授提供、2005年撮影）